原 著

急性期軽症脳卒中患者の身体活動量における実態調査

木下優華† 溝口 忠孝* 松田早代 藤永詩織
田口裕子 古賀 翔** 岡本浩義** 田中正則**
今村裕祐* 桑城貴弘* 岡田 靖* 杉森 宏*

IRYO Vol. 77 No. 6 (377－384) 2023

要旨 【背景】脳卒中発症後の身体活動量や離床の程度は死亡や機能予後に関連するため，神経症状の安定した患者は不要な安静を避け，離床の頻度を増やすことが有用であるといわれているが，急性期脳卒中患者において歩行による身体活動量はどの程度維持されているかの報告は少ない．そして自主的な歩行による身体活動量が多い患者，あるいは少ない患者の臨床的な特徴は明らかになっていない．【目的】本研究では重度の神経症状がなく軽症であるにもかかわらず，自主的な歩行による身体活動量が少ない患者の特徴を明らかにすることが目的である．【方法】2022年９月から11月の間に国立病院機構九州医療センター脳血管･神経内科病棟（当病棟）に入院した急性期脳卒中患者で，そのうち自立もしくは見守り以上で歩行が可能であり，歩数計の装着に同意が得られた患者を対象とした．歩数計の測定は歩数計装着後２週間もしくは退院までとした．１日平均歩数は測定期間の全歩数を測定日数で割り，算出した．【結果】本研究の対象の17例（76歳［74–81］，女性９例）のうち，13例が脳梗塞，４例が脳出血であった．対象患者17例の１日平均歩数の中央値は1,228歩であった．対象患者のうち，中央値以上１日平均歩数を有した患者を高活動群（74歳［72–76］，女性３例），中央値に満たなかった患者を低活動群（81歳［75–83］，女性６例）とした．

低活動群の患者の特徴は，高活動群の患者と比較して高齢で（74歳［72–76］対81歳［75–83］，$p=0.03$），Mini Mental State Examination（MMSE）（29［25–30］対22［18–26］，$p<0.01$）やN式老年者用精神状態尺度（NMスケール）（50［42–50］対31［19–36］，$p=0.02$）は，低活動群の患者は高活動群と比して有意に低かった．【結論】自主的な歩行による身体活動量が少ない患者の特徴は高齢であること，そしてMMSEやNMスケールといった認知機能が低いことである．入院中の身体活動量低下を防ぐため，対象患者に対して行動変容技法や歩行あるいは運動を積極的に行うような声掛けなどの対策を増やす必要がある．

キーワード：身体活動量，急性期脳卒中，高齢，認知機能

国立病院機構九州医療センター　臨床研究センター　看護部，＊脳血管・神経内科，＊＊リハビリテーション部　†看護師
著者連絡先：溝口　忠孝　国立病院機構九州医療センター　臨床研究センター　脳血管・神経内科
〒810–8563　福岡県福岡市中央区地行浜１丁目８－１
e-mail：m_tadataka_0121@yahoo.co.jp
(2023年６月27日受付　2023年12月15日受理)

Investigation of Physical Activity in Acute Minor Stroke Patients

Yuka Kinoshita, Tadataka Mizoguchi*, Sayo Matsuda, Shiori Fujinaga, Yuko Taguchi, Sho koga**, Hiroyoshi Okamoto**, Masanori Tanaka**, Yusuke Imamura*, Takahiro Kuwashiro*, Yasushi Okada* and Hiroshi Sugimori*
Department of Nursing, Clinical Research Institute, ＊Department of Cerebrovascular Medicine and Neurology,
＊＊Department of Rehabilitation, Clinical Research Institute, NHO Kyushu Medical Center
(Received Jun. 27, 2023, Accepted Dec. 15, 2023)
Key word : physical activity, stroke, advanced age, cognitive function